



四神相応

はじめに
内外の観光客でにぎわう京都。延暦13年(794)に桓武天皇によつて長岡京から遷都されて以来、1000年以上にわたり日本の首都として栄えてきました。遷都にあつたのは、「風水学でいう四神相応にかなう地が選ばれた」という話は有名で、皆さんも聞いたことがあるかと思ひます。



四神相応概念図(著者画)

巨椋池が比定されていますが、一方で白虎は木島大路、朱雀は下鳥羽付近の遊水池などという意見もあり、四神とされる地形が特定されていないのです。そのような次第で、今回は平安京と江戸について、本当に四神相応の地を選んで建設されたのか考えてみたいと思ひます。

しかし、それは本当のことでしょうか。私が初めて疑問を抱いたのは、四神にあてはめる山や川や道や池について、さまざまな意見があることに気が付いたからです。例えば京都では玄武は船岡山、青龍は鴨川、白虎は山陰道、朱雀は

四神とは
そもそも四神とは、古代中国の天文学に基づき、天空の四方に見える主な28の星を東西南北の4つにわけ、各方向の7つの星の形がそれぞれ四神と似ているので、

そこから四方を守護するという考え方が生じたようです。日本において四神が確認できる最初期のものは、有名な高松塚古墳やキトラ古墳の壁画や、奈良薬師寺の本尊薬師如来坐像の四神文であり、7世紀から8世紀初頭には伝来していたことがわかっています。ただし、この段階では四神が四方を守護するという考え方で伝わっていたのか、明らかではありません。

日本では

さて、日本で四神相応の断片は、天長5年(828)の日付がある空海の「綜芸種智院式」に「兎白虎大道。離朱雀小澤」とあり、同じく空海の漢詩文集「性霊集」に「東西龍臥」「南北虎踞」として見ることが出来ます。これが最初期と考えられますが、まだ完全に四神が出そろっていません。つまり、これらはすべて平安京が遷都された後のものなので、遷都当時の日本ではまだこの考えは確立していなかったと言えるのです。平安京について最初に四神が山・川・

道・池に当てはめられたのは、遷都から520年を経た正和3年(1314)の奥書を持つ「聖徳太子平氏伝雑勘文」であり、「左青竜は東より水南に流るなり。前朱雀は南に池溝あるなり。右白虎は西に大道あるなり。後ろ玄武は山岳あるなり。之をいう、四神具足の地」と記しています。

平安京の詔
ここで、桓武天皇が平安京の地を選んだ理由を、天皇自らが発せられた詔に見てみたいと思ひます。まずは「四方国の

百姓参り出で来ることもこれ便」。全国の百姓が納税に来るのに便利であり、さらに「山河襟帯」。京都三山が襟のように連なり、鴨川など河川が帯のように取り囲む自然の城であるからで、どこにも「四神相応の地」などと書かれていないのです。

後付けの理屈

これまで見てきたように、平安京の遷都については、その詔にも四神相応は見られず、また日本で平安京と結びつけられたのは、遷都から年月が経つてからだということがわかりました。これらの結果から、平安京は四神相応の地だから選ばれたと明言することはできないといえます。

もちろん、文献・史料に見えずとも、「現在の京都がまさに四神相応にかなっているのではないか。それが確たる証拠だ」という意見もあるかもしれません(事実あります)。でも、それは長きにわたつて繁栄した都市が、「たまたまそのような地形にあてはめることができたら」という後付けの理屈に過ぎないのか現在のところ述べることができないと思ひます。

江戸について

さて、これまで平安京について見てまいりましたが、いよいよ江戸に移りたいと思ひます。江戸幕府に引き続き、現在においても東京が首都であり続けるのは、「家康が四神相応の地を選んだから」という説が多数あることは前述しました。しかし、これは明らかにおかしいと思ひます。なぜなら、江戸を選んだのは徳川

家康ではなく、豊臣秀吉だからです。

江戸入りの理由

家康は小田原征伐のあと、天正18年(1590)に江戸入りをしています。そして、この江戸入りは家康の意思ではなく、秀吉の命令でした。例えば、万治3年(1660)に石川正西が書いた「聞見集」には、「小田原落城之後、秀吉公会津迄御下有て、家康様御在城は江戸可然らんと御めき(目利)きのよし」とあります。つまり、秀吉から「家康殿の御城は江戸にするがよい」と勧められたのです。勧められたと言えれば聞かざるが、これは明らかに命令です。この「聞見集」を書いた石川正西は、譜代大名松平康重の家老で、江戸入り当時は17歳でしたので、かなり信憑性が高い記述だと考えています。

また、石川は続けて、当時すでに確立した都市だった小田原や鎌倉について「両所はふな入りもなく江戸にはおとりたる所なり、江戸は年々に万事さかへまし」と述べています。

当時、城と城下町の建設には大きな変化が生じていました。織田信長にしても、豊臣秀吉にしても、中世以前の山城から領国経営を重視した商業や交通に適した場所に移っていたのです。

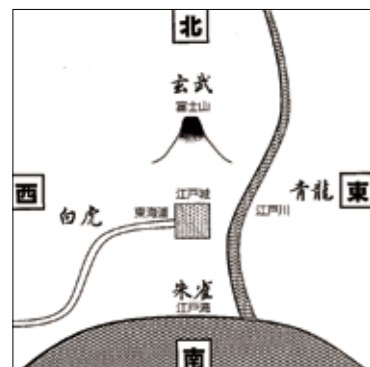
しかし、豊臣家をおびやかす存在である家康に、そのような適地を勧めるのは秀吉はずいぶん親切なように思えますが、当時の江戸は発展の可能性があつても、入江の埋め立てや、河川の付け替えなど、大幅なインフラ整備をする必要がありました。江戸は将来性が見込めるメリットを持ちながら、それには多大

な労費を使わざるを得ないデメリットがあつたのです。

富士山は江戸の北にあり

この史実一つを取つてみても、江戸が四神相応の地だから「家康が選んだ」可能性はないと思ひますが、加えて江戸は地形的にもそれに該当しない土地なのです。そして、それは皮肉なことに、四神相応にかなつているという説を唱える諸氏が証明しています。

例えば、大同工業大学工学部教授であり、宮元建築研究所代表取締役だった故宮元健次氏の『江戸の陰陽師 天海のランドスケープデザイン』を見てみましょう。左の「江戸と四神相応の概念図」は同書から転載したのですが、一目見ておかしな図であることがわかります。江戸城の北に富士山が描かれているのです。そして本文中には、「(家康のプレインであつた天海は)江戸城の地を、東に平川、西に東海道、南に江戸湾、北に富士山があるという四神相応にあてはまる場所として選地した」とあり、誤植ではないことがわかります。念のため記しておきますが、富士山は江戸(東京)の北にはありません。西です。



江戸と四神相応の概念図 (出典:『江戸の陰陽師 天海のランドスケープデザイン』宮元健次 人文書院 2001年)

おわりに

若かりし頃、京都を旅したおり、鴨川を眺めながら、ここには龍が住んで京都を守護していると想像し、とても清々しい安らかな気持ちになりました。しかし、「はじめに」で述べたように、比定地があいまいなことから、すぐに疑いを持ち始めてしまいました。四神相応説を唱える方々は、本来は論理的かつ合理的な考えを持ちながらも、神秘を信じる気持ちを捨てきれず、さまざまな可能性を苦慮して四神相応の都という口マンを守ろうとしていたのかもしれない。

(文:江口知秀)



鴨川デルタ 高野川と賀茂川と合流して鴨川となる鴨川は京都の東を守護する青龍とされる (京都市左京区 2008年撮影)